

精神療法における心像の展開

——ある不登校男子高校生の治療過程——

The Use of Dreams and Drawings in the Psychotherapeutic Practice

—In the case of a high school boy with school refusal—

岡田 敦 Atsushi Okada

I. はじめに

今日、心理臨床領域や精神療法分野においては、様々な技法のもとに、クライアントのなんらかの心像表現が用いられることが増えてきている。その一端は芸術療法ともなり、文字通り「心理療法家はイメージの世界を取り扱うもの」(河合 1991)と考えられる。ここでいうイメージとは、言葉での表現はもとより、夢や描画、箱庭や各種の造形作品、あるいは身体を用いたパフォーマンスなどの広義の表現活動によって、生み出される内的世界の表現全般をさす。特に解離や分割など、より低水準の防衛機制が活発な青年期症例においては、言語的な交流だけでは、分裂排除された心的内容物に触れることが困難なことが多いだけに、夢や心像表現を用いた治療的なコミュニケーションの展開が、大きな意義を持つてくる。そこで今回は、彼らの心像表現を内包し促進させていく「容器」としての治療関係を重視する立場から、ある思春期の一治療例を通して精神療法における心像過程の実際を紹介し、それがいかに自己治癒的に働くかを具体的に検討したいと思う。

II. 症例の概要

不登校や抑うつ、希死感、自殺企図などを呈した思春期の男子高校生の症例である。作品をふくめ治療過程の公表にあたっては、ご本人及びご家族の快諾を得てはいるものの、プライバシー保護のため、基本的な精神病理や問題にさしつかえない範囲で、病歴と生活史の一部に変更が加えられていることを、あらかじめお断りしておきたいと思う。

〈症例〉 T男、初診時16歳、県立高校1年生。

〈主訴〉 学校へ行きたくない、死にたい。

〈家族〉 4人家族の長男、下に小学5年の妹がいる。父親は43歳、北陸地方の出身。12人同胞の10番目。公立工業高校を卒業。ある事情で、家出同然に郷里を離れて当地にやって来る。大手製造メーカーに勤務。もともと「少しでもきちんとなっていないと気の済まない」人であり、若い頃から現在まで軽い確認強迫がある。母親は41歳、8人同胞の末っ子。夫(T男の父親)同様きょうだいが

多く苦勞した人のようで、中学卒業後、故郷の長野から住み込みで当地の洋裁教室に入るため出てくる。それ以後、洋裁の仕事が続け、今も頼まれて家で仕立てなどを行っている。口うるさく感情的になりやすい。両親は恋愛結婚で、当初より核家族。5歳下の妹は元気で活発、低学年より優等生で「オール5」を通しているとのこと。

〈生活史〉 特に問題なく出生、大病などしたこともなく順調に成育。3歳の時、家の中を走り回っていて、母の洋裁の針を誤って踏んでしまい、足の中で針がバラバラに折れて大手術をする。何かあると、よく「あの時は大変苦勞をかけた」と言われてきた。小さい頃はおとなしい子どもで、あまり外で友だちと遊ぶことはなかった。2年間保育園に通う。園では動作がゆっくりで「ワンテンポ遅れる」ことが多く、お遊戯なども覚わずいつも叱られていた。この頃、妹が生まれている。また教育面に熱心な親の希望で、保育園の時から順次ピアノや書道、水泳や珠算などを習いに行った。その後、書道だけはずっと続け最高位の6段までになり、よく入賞した。両親がついてかなり厳しく、「叩かれながら」練習させられたという。

小学校の低学年は、ほとんど勉強せず成績は下位だった。小学校4年の秋の父兄会で、母親は担任の教師よりT男の成績が「ビリから5番目」であることを知らされる。大変恥ずかしい思いをして帰ってきた母は、その日、家でT男に対して「本気で、布団叩きでビシビシたたいて」怒る。この事件をきっかけに、母親がついて半ば強制的に勉強させられることが始まる。1日に9冊の問題集をやるのが日課となる。その結果、小学5年生の終わりには、ほとんどの教科が「5」となった。友だちと遊ぶことも禁止されて、放課の時間も「少しでも覚えよう」と一生懸命勉強する。小学6年から中学にかけて成績はトップクラス、「教科書を全部丸暗記してしまう」くらいの猛勉強で、1年間で大学ノートを33冊書き潰してしまうほどだった。小学校高学年の頃は「友だちがいなくて、一人ぼっち」となるが、それでも中学時代は「田舎からでてきたような変わった奴」としてけっこう人気があり、クラス委員なども務め、教師からもよく可愛がられていたという。小さい頃から両親に言われていたとおり、一生懸命勉強して「教育大に入り、学校の先生になる」と

というのが、将来の夢であった。

〈現病歴〉 中学1年の頃から、学校の定期テストの前になると、必ず腹が痛くなり下痢や吐き気がする。何度も同じことを繰り返すため、中学2年の春、近くの内科医院を受診。精密検査の結果、特別の異常は認められず「ストレスからきているのでは」と言われる。

X年4月、「絶対受かるから、大丈夫」という担任の強いすすめで、地元の進学校である県立A高校普通科に入学する。中学にくらべて勉強する量が格段に増えて、小テストが毎週のようにおこなわれることに負担を感じ始める。毎日の勉強が自分の思うようにはかどらず、ぐっすり眠れない日が多くなる。勉強していても「頭の中に入らない感じ」となり、何度も同じところを読み返したりする。数日たつと、覚えたことをすぐ忘れてしまったようで不安になる。それでも夏休みの間は一時的によく、不眠もなかった。

2学期になると、再び上で述べたような感じが強くなってくる。成績も入学時は、学年400人中50番内にいたのが、200番台にまで下がってしまう。次第に「学校へ行きたくない」と思うようになる。何か成績がどんどん落ちていってしまいそうで、「このままではとうてい望みの大学に入れない」「自分ひとりで納得のいくまで勉強したい」と思い始める。戸締りやガスの元栓などが無性に気になりだし、確認強迫が始まる。

同年11月末、高校での3者面談（本人、母親、担任）の席で、T男は「学校をやめて、自分だけでやっていきたい」との申し出をする。しかし担任の教師からは「もっと努力しなければ駄目だし、大学は自分の力に見合ったところへいけばよいのだから」と言われ、全然取り合ってもらえない。12月2日の夜頃から、家で目立って様子がおかしくなる。一人でしくしく泣いている。一体どうしたのか親が聞くと、「どうしても学校へは行きたくない」、「俺は駄目な人間だ」「もう死ぬしかない」などと言う。食事を取るようすすめても、「御飯、お母さんが怒るから嫌だ」「御飯の中に毒が入っているから嫌だ」などと言って、頑として食べようとはしない。夜中も一晩中眠らないで、なにか自分の部屋でゴソゴソやっている。深夜、大声で「お父さんはわけの分らないことばかりを言う」「嘘ついてる！嘘ついてる！」と叫ぶ。翌朝、そのことについて聞いても、どうもよく覚えていない様子。学校には行こうとせず、ビニールの袋を捜してきて「これをかぶって、俺は今から死ぬんだ」と言ったりする。

親は本気にしないでいたところ、3日の夜9時ころ家出、近くの神社の池に飛び込んで死のうとするが、水が浅くて死にきれず、結局ずぶ濡れになって深夜家に戻って来る。しきりに「死にたい」という言葉を口にする。

このような状態のため、翌12月4日、両親に連れられK病院精神科外来を受診となる。

〈診断と治療の構造〉 初診医の診断は「抑うつ状態」。ただし思春期の「自己」の確立をめぐる問題を背後にもつこと、勉強への取組み方などに顕著にみられる強迫的防衛が破綻する時、抑うつを踏みぬいて妄想一分裂的水準にまで陥ってしまうような脆さ（「毒が入っている」との迫害的な訴え）をもつことなどが、当初より推定された。主治医より抗うつ剤、安定剤が投与されるとともに、「とりあえず学校をめぐる強い葛藤について、よく相談してみる」という説明のもとで、以後サイコロジストである報告者に精神療法の依頼が出された。週1回約60分、対面法（終結3か月前より、T男の希望もあって2週に1回に変更）での面接。治療期間は1年4か月、面接回数58回にて終結となった。

III. 治療過程と「心像」の展開の実際

治療の流れにそって、便宜上6期に分けて報告する。特に今回は、治療関係に支えられた中での「心像」の展開を中心に、治療過程を描写したいと思う。報告された夢の総数は56、描画の総数は41枚。紙幅の都合もあり、その中から特に治療者にとって印象深かったものを夢は15、描画は20枚選んで、その時点での「読み」や印象をもまじえながら、以下に順に検討してみることにする。

〈第1期〉「引きこもり」の保証（初回～第10回面接まで）

T男を「駄目息子」として決めつけ、叱りつけてなんとか学校にいかせようとする両親に対して、治療者はくり返し介入する。とりあえず登校刺激を減らして「引きこもり」を保証する。T男自身とは、「絶対に死なない」との約束をしてもらう。今後のことは「一緒に時間をかけて考えていく」とし、学校の方も休学とする。次第に面接の中で、小学4年の「布団叩きで、母親に血まみれにされてしまった」という事件以降、彼の勉強への強迫的な「完璧主義」が、いかに形成されていったかが詳しく語られていく。

第4回面接時、以下のようなイニシャル・ドリームが、

半ば自発的に報告される。

初回夢《セスナ機に「ただで乗せてやるから」と、知らない男の人に言われたので乗ってみると、空を飛んでいる時に操縦している人が、急に「ギョッ」という感じで別人みたいになってしまっていて、ぼくは下に突き落とされてしまう。》

連想は特になく、「ともかく怖かった。急に殺人鬼みたいに変わってしまっていて。最近モヤモヤした怖い夢をよく見る」と言う。これはそのまま、中学の担任の強いすすめで進学校に入学したものの、成績の低下などによって突然「突き落とされる」ようにして落ち込み、混乱してしまった彼の現在の問題を端的に示す、自己紹介的な夢のように思われた。「別人」に変わってしまう操縦士は、「努力しなければ駄目」と叱咤し、結果彼を追いつめてしまった担任教師を思わせるが、当然、治療者や治療の始まりに対するこれから先の彼の不安な気持ちを、同時に物語っているとも取れる。安易に「ただで」という誘いに乗るべきではないという警告のようにも思える。このように夢が、治療者とクライアントの精神内界をつなぎ、交流を深めることのできる「通路」となりうることを感じる。そこで、これからまた何か印象に残る夢があれば、面接時に報告をしてもらうよう依頼しておく。

第8回面接では、上で述べた心的状況を、より明確に示してくれると思われる次のような「置いてきぼり」の夢が報告される。

夢8《高校の担任のH先生に連れられて、学校のみんなと船に乗せられて、エトロフとか北方の島に出かけて行く。ところが、いつの間にか自分ひとりだけがそこに置いていかれて、みんなは先に行ってしまう。そこはソ連の基地みたいところで、たくさんの外国人に囲まれて、ぼくはオロオロしている。》

「今、自分におこっている実際のことが、そのまま夢になったよう。ぼくだけ置いてきぼりを喰った。みんな先に行ってしまうとに残されてしまったみたい。」「ソ連」の連想は、「日本が戦争で負けた時、捕虜をシベリアに強制的に連れて行ってひどいことをしたというから、あまり好きになれない」。当然、現在の家に「引きこもった」不登校の状態が、受験戦争から脱落してしまった「抑留生活」ということでもあろうか。

続く第10回面接に報告の夢では、「鬼婆」の姿を取って、T男が内的に持つ「苛酷でおそろしい母親像」が登場し、彼を迫害し苦しめ、ついには「殺そう」とすらす

る。

夢11《道の途中に、体格のいい「鬼婆」みたいなおばさんがいて、なぜか無理矢理つかまえられると、ぼくの口の中に手を突っ込んで、ゲエーゲエー吐かせようとする。それがあまり苦しいので、そのうちに内蔵まで全部出されてしまいそうで、逃げるのにもう必死で足をバタバタやっている。周りは青と黒とが入り混じった色で、草も木も家も何もない。》

今度は、細い道が続いているような所に、薄気味の悪い白髪だらけのおばさんがいる。本当の「鬼婆」みたいでおそろしい。そこには井戸があって、その水の中にぼくは首を突っ込まれてしまい、苦しくて苦しくてジャバジャバもがいている。》

連想は、「食べ過ぎた時なんか、よくお母さんに無理矢理口の中に手を突っ込まれて吐かされたりする。神社の池で死のうとした時も、水を飲んで苦しかったけど」。また現在の家庭の状況と結びつけて、「眠ると変な夢を見るし、起きれば起きたで家の人からきついと言われるし、少しも休まらない」とも言う。それは「特にお母さん、“私は世界一不幸な母親だ。おまえは、世界一駄目な息子だ”って。何も言い返すことができないから」。

治療者には、この夢の恐ろしい「鬼婆」という姿をとった、いわば苛酷な超自我として働く彼の迫害的な内的対象イメージ（「こわいお母さん」像の内在化）が、この先いかに穏やかなものに変容していけるかが、今後の治療の大きな鍵となるように思われた。それは一方的にやられてしまい、「もがいている」T男が、現在の危機的状況の中でどのように「自分」らしさを見つけ直し、外界に対して自らの力で立ち向かえるようになるか、ということでもあった。

〈第2期〉 かりそめの「立て直し」と挫折、再度の「引きこもり」（第11回～第22回面接まで）

両親の「根負け」による一時的な態度の軟化によって、T男は逆に両親の期待を取り入れて、4月の新学期からの登校を自分から決めてしまう。また、夢や描画の心像表現の中に、彼が背後に持つ「自惚れ」の強さ、「なんでもやれて、みんなから称賛される」との自己愛的で万能感的な自己の誇大化した理想像が、次第に多く示されるようになる。

第11回面接で、本当は「ダ・ヴィンチ」のような「なんでもできる芸術家」になりたいと思っていたところ、中学1年の時、「絵や音楽なんかで、喰っていけるなんて



写真 1

思ったら大まちがいだ！」と親から頭ごなしに言われ、「夢が壊されてしまったと感じた」こと、それでも去年の中学3年の夏休み、母親の実家である長野に里帰りした際、内緒で水彩で風景を描いていたところ、「お母さんに見つかり怒鳴られて、絵はその場でビリビリに破られてしまった」とのエピソードが語られる。「今、本当は絵を描いてみたいけど、道具も隠されちゃって全然できない」と言うので、治療者は「もし何か描けるようなら、描いて次の面接に持ってきて」と、彼にクレパスと画用紙を渡しておく。後で付き添って来ていた母親にも、「治療上必要なことですから」説明、これを了解してもらおう。以後、夢と描画が並行して面接に持ってこられるようになる。(ここで絵画療法を導入したのは、もちろん彼の「描いてみたい」という希望に波長合わせをすることであるが、先回の「鬼婆」の夢のように、夢があまり退行促進的にまた破壊的に作用しないようにとの危惧が、治療者側にあったためでもあった。)

続く第12回面接には、さっそく次の「龍」と題された絵を含め、2枚の作品が持って来られる。その絵のあまりの迫力に、治療者も少し圧倒される。

描画 1 《龍》(写真 1)

クレパス画にボールペンで、下から左向きの体に、正面向きの顔の龍。背びれが赤いため、怒って炎をあげて、にらみつけているかのようでもある。右手にやはり赤い玉を持つ。

「ふっと思ひ浮かんだので、そのまま描いてみた。願いが何でもかなうという如石を握っている。仏さんが持っている石と同じもの。今にも飛び出してきそうで、お母さんは“気味が悪いし、罰が当たるといけないからそ

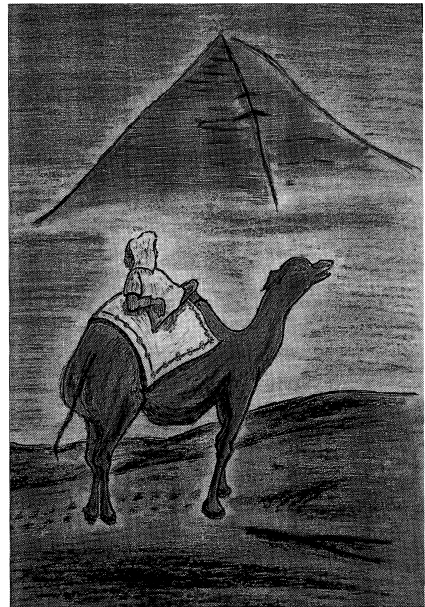


写真 2

んな絵はやめろ”って言ったけど」と、少し得意気でもある。「今、龍の背中に乗って、自由に飛んでいけたらいいなあと思うけど」とも言う。万能感的な力への期待や、飛翔への希求(夢1の「セスナ機」に対応か?)を表しているとも取れる。またほぼ同じ時期に、自分から「もう一度、高校をやり直してみたい」と親に申し出て、一応その方向で学校にも連絡、あくまで「試しに」やってみることとなる。

第13回面接時には、一転、地をのんびり歩く「らくだ」が描かれた絵を持参する。

描画 4 《旅遊び》(写真 2)

縦描きのクレパス画にボールペン。砂漠を右手に向かおうとするらくだ、その背でひと息憩うかのような人。背景は霧がかかっているのか、ピラミッドがまるで宙に浮いているかのようでもある。

彼に連想を求めると、「砂漠の中を、ただオアシスを求めてブラブラ歩いてるところ。旅をしながらのんびり遊んでいる。ピラミッドを見上げるというのは、やはりこれからまた高校へ大学へと、上を見上げてるような感じだから。何か今まで、親から散々張り倒されたりしてきたけど、よくここまで来たなあって。で、これからどこへ行くのかって」。やはり、「上昇」への希求は強い。

4月に入り、登校日直前の面接第15回の夢には、迫害を受ける「英雄」でもある「日蓮」が登場する。それは



写真 3

不屈の「闘い」と「逃亡」の再開を予感させるものでもあった。

夢16《日蓮が、大勢の人から追われて逃げている。髭は伸びほうだい、衣はヨレヨレの怖い顔をしたお坊さんで、「かくまって欲しい」と頼まれるので、ぼくも農民たちと一緒に、近くの山小屋にかくまってやる。ところが今度は、日蓮を逃がしたということが発覚して、ぼくまでが追われる身となってしまって必死に逃げている。》

「日蓮は、ずいぶん苦勞をして自分の思っていることを貫いた人。何回も島流しされても負けなかったって」。続いて以下の連想が、T男自身の姿と重ね合わされて語られる。「今の自分の負けたくない気持ちと、日蓮の生き方が結びついのかもしれない。実際、また学校でテストに追いまかれるんじゃないか、歳下の人間に追いつかれるんじゃないかという心配もある。案外、自分が日蓮みたいのに憧れてるのかもしれない。自分もやれば、なんか歴史に名が残せられるような気がするし、そうなら素晴らしいと思うから」。

よほどこの夢がこころに残ったのか、この回の絵画にもその一場面が描かれてある。

描画 7 《夢の中の山小屋》(写真 3)

「夢の中」というので周囲が白く残される。茅葺きの農家風の軒家、クレパス画。全体に森や山に包まれた感じで、柔らかい印象を与える。

連想は、「なんだか長野のお祖母さんの家に似ている。見ているだけで、なんかやさしくて暖かい感じがしてくる。お祖母さんは、こういう縁側に出て手鞠なんかを作っていた。それをぼくだけがいつも面白がって見ていた。



写真 4

親からは“男の子がそんなもの見とるな!”ってよく怒られたけど。

「日蓮」をかくまうこの「山小屋」、「やさしくて暖かい」お祖母さん(迫害的な「鬼婆」と対極的な、やさしく育む「母性」的イメージ)が住むというこの「家」(=居場所)を、いかに治療関係の中で守っていけるかが、これからの治療的展開の重要なポイントでもあろう。お祖母さんの作る「手鞠」は、今この場での「絵画表現」という作品を媒介にして、当然「ビリビリに破られてしまった」(この「家」のある長野の風景を描いていた)彼の「芸術家」への夢と、密接につながってもいよう。そしてまた自己像としての全能的で戦闘的な「日蓮」は、彼の内界での「鬼婆」の部分的な取り入れでもあり、ともすれば外界に向かおうとする時、妄想的・分裂的な「超男性像」(実際の日蓮の生き方がかなりそうであったように)になってしまいがちで、やはり無理の多い選択と言わざるをえないからでもあった。

ともかく新学期となり、留年ということで新1年生と同じ学年で高校へ通い始める。その次の週の第16回面接では、「学校には行っている。まあなんということもなかった」と言う。しかし、持参された絵には、やはり天に昇ろうとする「龍」が描かれてある。

描画 9 《昇龍》(写真 4)

サインペンとクレパス。全体に色調に乏しく暗い。

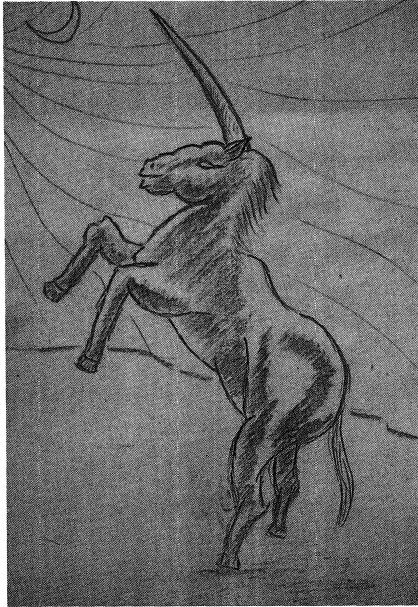


写真 5

稲光の中、飛び立とうとしている左向きの龍。厳しい顔をしている。左上は描画 1 にもあった「如石」であろうか。

「雷が鳴って稲妻が走って、それが龍にあたっている。下は海で、今まで住んでいたところがちょっと嫌になったんで、天に昇っていこうとしている。今度また学校に行つて、ぐうっと成績が上がっていかないかなあつていう気持ちを表した」と自分から説明する。

またこの同じ回、『野性の証明』としての以下のような「戦闘」の夢が報告される。

夢17 《映画の『野性の証明』という感じ。ぼくは、どうしてか味沢岳史（主人公）と一緒に、自衛隊に追われている。ぼくが手伝って、武器を手に入れたりと、味沢は次々に敵の戦車をぶっ潰していく。ところがそこに、トンネルの中から頼子（少女）が飛び出してくる。ぼくは「来るな！」って、必死で止めるけど、それでも出てくるので、自衛隊に殺されてしまう。みんなやっつけてしまってから、味沢と一緒に頼子のお墓を作って拝む。「もういい。ここまでってきたのだから」と思う。》

明らかに「味沢」は、「日蓮」の発展形でもあり、今度は逃げるばかりでなく T 男の協力で、「敵」と闘い「やっつけてしまっているのが注目される。連想は、「味沢」やはり映画の高倉健みたいで、強そうで恰好よかった。



写真 6

自衛隊をひとりで敵にまわしていくんだけど、必死に生きぬいていくところが何んともいえない。殺されてしまう「頼子（少女）」は、先回の「手毬」のイメージ（「女の子」の姿をとった内界の情緒的機能）に関連しており、いかにこの先の夢の中で「生き返ってくるか」が重要であるように治療者には思われた。

その後、何週間かにわたって、一見順調に通学できているようであったが、描画や夢にかなり危機的な内的表現が連続してなされ、破綻が再び迫っていることが先取りして示される。治療者も、少しずつ不安になる。

第17回面接では、初めて（そして唯一の）次の未完成の絵が持ってこられる。

描画11《ユニコーン》（写真 5）

鉛筆画。左上の三日月に向かって、2本立ちする一角獣、目がなくどことなく不気味でもある。未完成は、抑うつや自殺念慮など危機的状況のサインともなる。

連想は、「角に超能力があるというので、人間に次々に殺されていって最後に一匹だけ残ったユニコーンが、神に召されて天に昇っていくところ。辞典に載っていたのを描いたけど、途中で思うように描けなくなってしまった」。彼の持つ「万能感」の終焉を意味しているのであろうか。この「昇天」は「龍」の場合とは異なり「死」でもある。そのことを治療者が指摘すると、「子どもの頃、



写真 7

本当に高校や大学に行きさえすれば、何でもできるようになると信じてた。『モナリザ』が日本に来た時にダ・ヴィンチのことを調べたら、芸術や科学なんでもできる人だって。自分もああいうふうになれると勝手に思い込んでしまっていた」と肯定する。

続く第18回、19回の描画では、妄想的・分裂的世界を思わせる「人物像」が連続して描かれ、一転緊迫した雰囲気となる。それは彼の外界に対する迫害感の表明でもあった。

描画12《冷酷人間》(写真6)

クレパス画にサインペン。不気味な右向きの女性像、サングラスをかけた機械人間、レコードのジャケットにあったイラストを参考にしたのだという。

連想は「今度のクラスの女子は、みんなずるい。掃除もしないし冷たい感じで腹が立ってくる。知ってるB中の卒業生も、髪を染めたりパーマをかけたり、ああいうチンピラを見ると悲しくなってくる。そういう女性を描いた。マスクは人間の顔してるけど中身は機械、髪の毛は鉄パイプでできてる」。夢17の「頼子の死」とも結びつく冷たい女性像である。

描画13《H君、あるいは燃える中国人》(写真7)

クレパス画。人民服姿の男性の左向きの上半身、隈取りのある顔、後ろが赤く炎のよう。

「この絵にはいろんな意味がある」と言う。「Hという

のは毛沢東かぶれの友人。最近色気を出してきて気持ち悪い。鏡を見ながらニタニタ笑っているところ。あと今の中国の人は、日本の暴走族とかチンピラとちがって、国のために燃えている。今の日本の若者にその10分の1の気持ちでもあればいいのに」。そのまま、描画12と対をなすパラノイド的な「怒れる」自己像でもあろうか。

この同じ回第19回面接では、次の「ひきこもり」を思わせる暗示的な夢が報告される。

夢22《学校に、突然強盗が入ってくる。教室は自習中で、マスクをつけ手には包丁を持っているので「これはあかん」と思い、みんなとは別の方向に自分一人だけで逃げ出して行く。すると途中で工事の下水の穴があって、ぼくはそこに落ちてしまう。中には、髪の毛はボウボウ、ひげをはやした土方の小父さんがいて、「早くふたを閉めろ」と言う。強盗は「どこへ行った、どこへ行った」と上で捜している。「ああ、やれやれ、どうにか助かった」と思う。それからひよいひよいと穴を通って行くと、どういうわけかぼくの家すぐ前出る。》

連想は「ともかく逃げなきゃいけないっていう感じだった。土方の小父さんというのは、4～50歳くらいのも、ただ毎日穴ばかりを掘っているような素朴な人だった」。この夢でT男を助けてくれる「土方の小父さん」は、彼を突き落とす「操縦士」や置いてきぼりをする「H先生」、追われる「日蓮」や戦う「味沢」とはまた異なった新たな男性像であり、当然この時点での治療者イメージや治療関係を、そのまま反映しているように思われた。

5月半ば、こうしたT男の内界の心像の変化にあたかも呼応するかのように、現実にも一つの大きな事件が起こる。「クラスの他の生徒には、留年していることは決して公表しない」との、学校側と彼との事前の約束にもかかわらず、「激励するつもりで」担任の教師が、つい無断でこの事実をみんなに明らかにしてしまったことに過剰に反応、「非常に腹が立って」次の日から不登校となる。小学6年になった妹の健康優良児の表彰という負荷が加わり、また中間試験をひかえ「再び完璧主義が出てきて」、不安定になり始めた時でもあった。

〈第3期〉「家」での闘い・行動化の出現(第23回～第29回面接まで)

再度不登校が始まったことに家族は大きく動揺し、T男をきつく攻め立てる。彼が怒って、辞書や参考書を破ってしまったこともあって、母親「言って分かん奴は

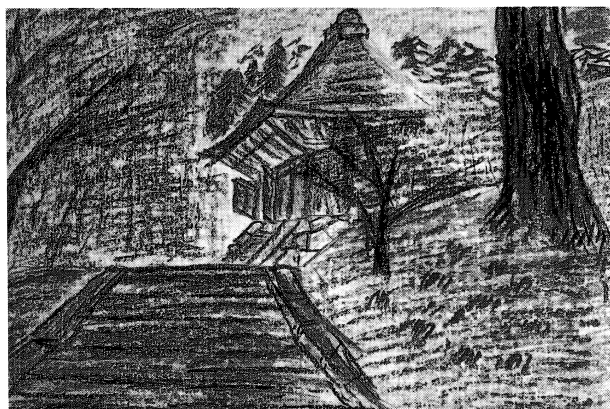


写真 8

叩くしかない」「今に凶悪犯人になるから、その前に精神病院にぶち込んで一生入れておいてやる」「こんな立派な母親から、おまえみたいな駄目息子がなぜ生まれたのか」、妹「恥ずかしくて世間に顔向けできない」「ひどい兄を持って、私は世界一の不幸者だ」「悔やしかったらこんな大きな賞状をもらってみろ」などと、口やかましく責める。初めは止めに入っていた父親も、間に立ってオロオロし、「おまえが一番悪い！」と結局彼を攻撃する側にまわってしまう。

このような状況下の第23回面接では、彼自身が「味沢」になっている夢が報告される。

夢24 《雪がたくさん降っているところで、今度はぼくが味沢岳史になっている。雪の穴を掘って、ズボズボってその中に隠れる。これで誰も分からないだろうと思う。》

連想は「これは、散々お母さんたちから追いまくられてきたから、ぼくが味沢になってしまったのかもしれない。少しでもぼくが何か言い返そうものなら、お母さんは気が狂ったみたいに感情的になってしまって、次々にひどいことを言う」「雪の中に隠れる」というのも、どこか「死」への傾斜を感じさせる。そこで「遭難する危険」について、少し話し合いをする。

続く24回面接の描画では、やはり平泉の「中尊寺」が描かれた絵を持参する。

描画15 《中尊寺金色堂》(写真8)

写真を忠実に模写したもの。正面左に階段があり木々に囲まれた金色堂。クレパス。

「平泉は頼朝に追われて、義経が逃げたところ」という。描画7の「日蓮」がかくまわれた「山小屋」を思わ

せる。連想は、「仏さんが、いいふうに自分を助けてくれないかなあと思って。ぼくの場合、お父さんもお母さんも妹も、今は全部敵だから」とのみ言う。

5月末の第25回面接では、母親や妹が「血も涙もない冷酷人間」であり、「無茶苦茶に腹が立つ」ことが感情をこめて語られた後、治療者が付きそいの母親と話をしている間に、T男のみ先に帰宅。自分の部屋の窓ガラスを割り、本棚をひっくり返したりラジカセを叩き壊したりして「怒り」を爆発させる。ひとしきり暴れた直後、「これが母親に見つかる」と「半殺し」にされてしまう」との強い恐怖に襲われ、現金と簡単な衣類を持って自転車で家出する。一時は、国道を走る大型トラックに飛び込んで「本気で死のう」と試みるが、間一髪車は急停止して無事、結局またも死に切れず夜7時頃帰宅する。治療者は、彼が辛ろうじて生きのびてくれたことに、安堵の胸をなでおろす。本治療上、最大の危機でもあった。後の面接で、この時彼が体験した「半殺し」にされるとの強い恐怖感、小学4年の「父兄会の後で、母親に血まみれにされてしまった布団叩きの怖さ」と同じであったことが語られる。知らぬ間に、治療の場でこの時の外傷的体験を再演し、実際の行動化の形を取って再現化してしまっていたことに気付かされる。外界と内界との境目がなくなってしまって、「夢」が現実化してしまったようにも感じる。

その後しばらく、治療者は合同面接や家族面接を通して積極的に介入、なんとか危機を乗り切ろうと試みる。まずすっかりとり乱してしまって、「一生入院させておくか、いっそ自分の手で殺して一緒に死ぬか」と泣きくずれる母親の動揺を、とりあえず安定させるように努める。T男とは再度、「どんなことがあっても絶対に死なない」との約束を取りかわすとともに、彼をいつも「死」へと追いつめてしまう、内的に持つ迫害的で苛酷な「怖い母親像」を明確化し、それが緩和されていく必要性をくり返し指摘していく。

これ以後、彼は自ら希望して、母親とは別に単独で通院するようになり、また家での「音楽」への沈潜が始まる。「絵画」同様「女の子のするもの」として、小学校高学年以降禁止になっていたピアノに向かい、一日数時間教則本を練習することが日課となる。初めは反対していた両親も「死なれるよりは」と、結局これも黙認することとなる。学校は再び休学とする。

夢や絵画にも、これ以後「音楽」をテーマにしたもの



写真 9

がしばしば登場する。第28回面接ころから、当時人気を博していた“YMO シリーズ”の絵がしばらく続いて描かれる。

描画18《高橋幸宏》(写真 9)

鉛筆画、写真を見て似せて描いたというのが、よく人物の特徴が出ている。

「YMO、コンピュータを使って、他の人に出せない音を出すのがたまらない。ああいうのに憧れるけど、やっぱり音楽では喰っていけないから自分には無理」と説明。「ダ・ヴィンチ」や「日蓮」よりも、より現実的アイドル的な理想の男性像ということか。

続く29回では、「革命」が勝利する次のような夢が報告される。

夢29《宮崎美子のレコーディングを手伝って、スタジオでいろいろ打合せをしていると、友人のH君から緊急の電話がある。「いよいよ立ち上がる時が来た」というので、機関銃を持ってみんなで東京をめざして攻めてゆく。そこでまた自衛隊の特殊部隊と戦う。途中で山の中に入り機関銃を撃ちまくり、ついに戦いに勝つことができて、革命は成功する。》

連想は、「H君(描画13に登場)」というの、社会主義かぶれの人間。日本ではソ連や中国のような革命は無理でも、田中角栄みたいな悪い奴は、日本のために倒さないといかんと思うけど。長い「戦闘」の終わりを、先取り

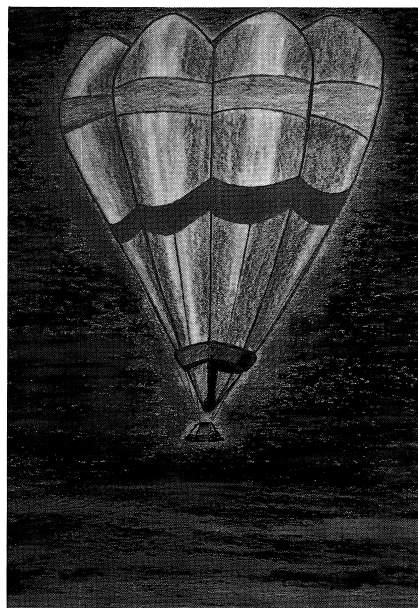


写真10

して示してくれる夢のようにも思われた。「宮崎美子」は「頼子」の進化した姿ともとれ、以後しばしば夢や描画に、若い女性アイドルの芸能人が登場するようになる。この時期熱中していた「音楽」とともに、内的世界での「女性」の姿をとった情緒的機能の回復を思わせる。

〈第4期〉「冒険」への憧れ・「死と再生」の体験(第30回～第38回面接まで)

家族内の動揺が少しずつおさまるにしたがい、彼自身も次第に落ち着きをとるもどす。それまで家に閉じ込めりがちだったのが、外に向かって活動的になっていく。「家出」をきっかけとして、自転車で遠出をすることがひとつの楽しみとなり、「冒険」と称して半島を一周してきたりもする。「最近、なんだか不良願望が出てきた。もっと好きにやらないといけない」とも言う。こうした内的変化とともに、「冷酷人間」と思っていた両親や妹とも、少しずつ自然に打ちとけていられるようになる。そしてまた次第に、内界と外界との「境界」が強化されていく印象を持つ。

第31回面接では、新たな出発を思わせる次の絵画が持ってくる。

描画21《夜明けの旅立ち》(写真10)

クレパス画。まだ暗い夜明けの海を背景に、飛び立っていく熱気球。

「テレビでやっていた。太平洋を横断するということで、

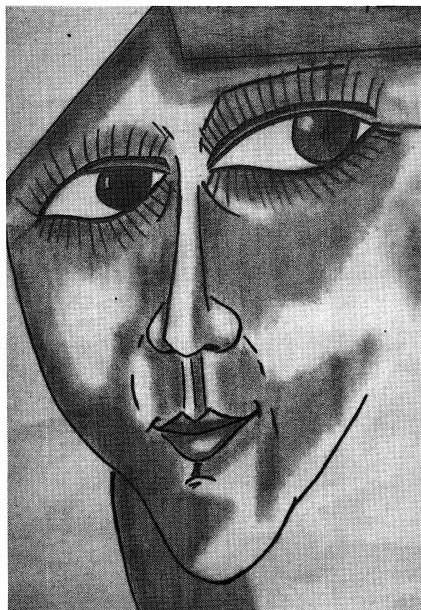


写真11

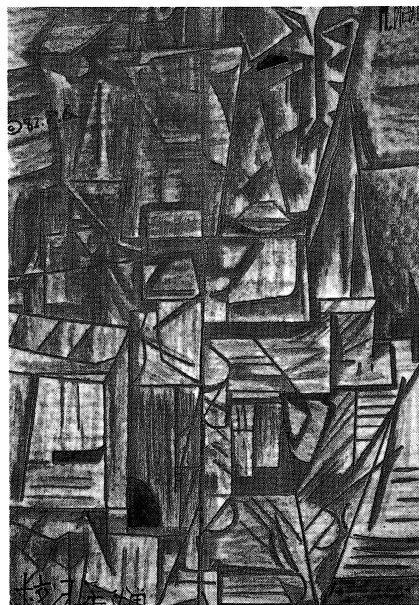


写真12

気球で飛び立っていこうとしているところ。ぼくも何か冒険がしてみたいって思った。夜が白み始めてすごくロマンチックな感じがする」と述べる。同じ空を飛ぶものではあっても、これは以前の「龍」ほどの万能感を持たないのは、それなりの治療的な心像の変化でもあろう。

続く第33回面接では、今度は理想のアイドル的な「女性像」を描いて持参する。

描画22《竹内まりあ》(写真11)

“YMO シリーズ”の系列に入るミュージシャンの似顔絵、鉛筆画。

連想は、「陽に焼けた健康的なところがいい。この人はあったかい。冷酷人間なんかじゃない」と言う。もちろん描画7の発展形と見ることができる。

第35回面接から36回面接にかけて、以下のような「死」と「再生」、そして何らかの「償い」を思わせる深い宗教性をもつ夢が、連続して見られたことが報告される。

夢35 《外で雷に会う。雨が降ってきたので、近くのタバコ屋に雨宿りさせてもらう。呼んでも誰も出てこないの奥に入っていくと、おどろいたことに宮崎美子があぐらをかいて酒を飲んでいる。「早く酒を持ってこい!」と、一升ビンをぶつけられる。「これが日本の母の姿か」と思う。すると突然、窓が風の力で割れてしまう。雨戸を閉めなくてはと思い、そちらに近付くと、今度はガラスが粉々に飛び散って、

手とか顔とかに刺さって、血まみれになってぼくはそのまま死んでしまう。》

連想は「宮崎美子、“日本の母親”の理想だと思っていたのに、夢では全然違ってた。介抱くらいしてくれるのかと思ったけど、何もしてくれなくてがっかりした」。

夢36 《場面の端が、太陽の光りがあたったようにぼんやりした感じ。廊下があって、そこへ長野の死んだお祖母さんが、風呂敷包みを持ってやってくる。

「おおお、可愛い顔をしとる。まるで女の子みたいだねえ」と言って、赤ん坊のぼくを抱っこしてくれる。そこへお母さんもやってきて、お祖母さんといろいろ話をする。》

「長野のお祖母さん、ぼくが生まれてすぐ会いにきてくれたらしい」と言う。「まだ目の見えない赤ん坊だったぼくを、廊下でまっ先に抱っこしたって聞いた。本当にお祖母さんはやさしかった。ぼくのことをいろいろ分かってくれて、嬉しかった」。お祖母さんの言葉にある「女の子みたい」という点も重要であろう。

夢37 《とにかく高さが5～6メートルもあるような大きな門がある。周りは暗い。そのうちに門がギョーッと開くと、向こうの方から光りがバアーとあふれてくる。そこには周りを光りでつつまれた奈良の大仏さんがいて、どうしたのか涙を流している。》

連想は「マリア像が涙として血を流したり、観音さん



写真13

が戦争や人間の争いなんかを悲しんで、涙を流すという話を聞いたことがある。前は仏さんなんかまったく信じなかったけど、こういう夢を見ると信じたくなってくる。今まで見たことのない、なんかすごく不思議な夢だった」。

やはりこの夢の「大仏」がよほど印象的だったのか、第37回面接では描画にも登場する。

描画26 《大仏さんの涙》(写真12)

キュビズム的な表現による大仏像。右上は涙を流している横顔か。この回から、「ダ・ヴィンチにならって」鏡文字でサインが入るようになる。左下にはやはり裏返しされた文字で「戦争反対」とある。クレパス、サインペン。

「見てると、なんか引きこまれていきそうな感じがする。今度は「戦争反対シリーズ」というのをやりたい。戦争や殺し合いは、どんなことがあっても絶対してはいけないことだから」と説明する。

治療者は、彼の基底にもつこの一連の心像表現の変容と、前進的な展開にいたく感動する。特に夢36の「やさしいお祖母さん」を介しての母性的体験（当然、治療関係上の体験の織り込みを背景にもつ）は、次の「大仏の涙」や「戦争反対」という言葉が端的に表すように、T男がかなりの程度、苛酷で破壊的な内的対象の迫害から、自由になってきていることを可能にしてくれたように思

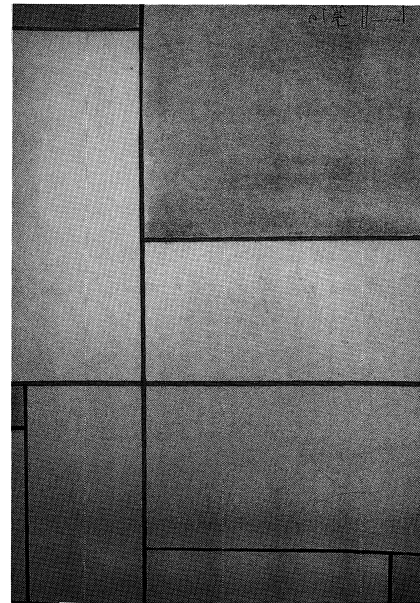


写真14

われた。事実これ以後、あれだけ恐れられ「鬼婆」のように感じられていた母親も、不思議に「なんか最近、弱くてかわいそうな人のように思える」ようになっていく。

8月半ば、休暇を利用して家族そろって、「お祖母さん」の家でもある長野の母の実家に遊びに行く。林業などを営む叔父の手伝いについて回り、木に登り枝をはらったりして「野性的な」経験（夢17は『野性の証明』であった）をする。帰ってきてすぐに発熱、38度C台が続き1週間以上寝込んでしまう。初めて面接が休まれる。

〈第5期〉「野性」と「自己鍛練」(第39回～第48回面接まで)

発熱後、長野の自然の中で体験した「野性」への思いが強まり、「もっと体をきたえないと」と言って、自己鍛練が始まる。ランニング、腕立てふせなどを熱心に続ける。彼の希望もあって、以後薬物なしでも安定してられるようになる。4月からの学校への復帰を決め、少しずつ勉強も始める。夜間ランニング中、野犬に襲われるが「蹴り倒して」撃退するということもあった。

第40回面接では、「田舎」を舞台とした次の夢が報告される。

夢41 《田舎の木造の校舎で、ぼくは学校の先生になっている。ほったの赤い、元気そうな子どもたちを教えている。なぜか国語の授業で、漢字のテストをする。》

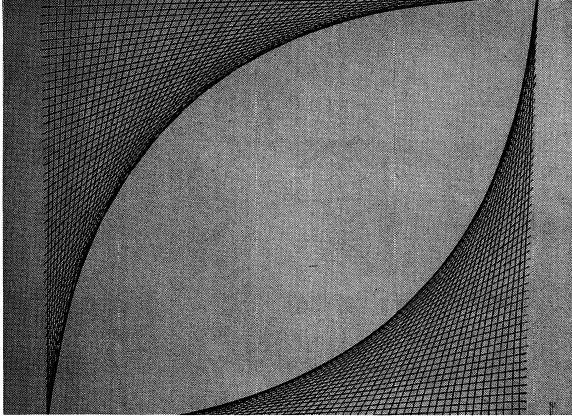


写真15

連想は、「本当にこうなれたらいいなと思う。学校の先生になるにしても田舎がいい。空気が全然違う。できれば長野とか、ああいう田舎の方に引っ越したい」。

続く第41回面接でも、「野性」への憧れを思わせる力強い「猿」の絵が持ってこられる。

描画28《猿》(写真13)

クレパス画。猿の親子。やはり鏡文字のサインと左上に「猿」の文字。

「母親の猿が子猿を抱っこしているところ」と言う。「足をけがしたのか、母猿が一生懸命なめてやっているところ。野性の動物は自分たちの力で、治すことができるらしい。こういう自然の世界への憧れがある。なんか力強くてたくましいところがいい」。治療者は、洋裁の針を踏んで「足の大手術をした」という彼の3歳時のエピソードを思い出す。そしてたぶんあったであろう母親の献身的な看病と、それとのつながりの回復をも思う。それは内的なこころの作用としては、力強くてやさしい「母性」心像による、自己治癒力の回復でもあった。

第42回面接以降数週間にわたって、「もうちょっと具象で表せなくなったから」と、一連の“抽象画シリーズ”が始められる。それぞれに作品番号がつけられる。

描画29《作品第1》(写真14)

描画31《作品第3》(写真15)

「何かすいこまれそうな感じ。向こうに新しいものが見えてくるようにも思う」。

描画32《作品第4》(写真16)

描画35《作品第7》(写真17)

「今度は、菱形がだんだん崩れていって、円に近付いていくところ」。

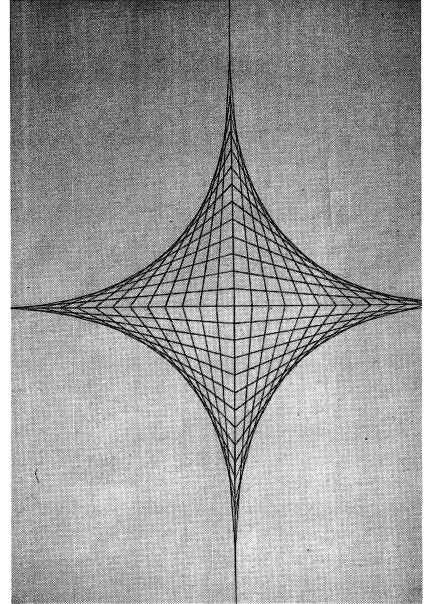


写真16

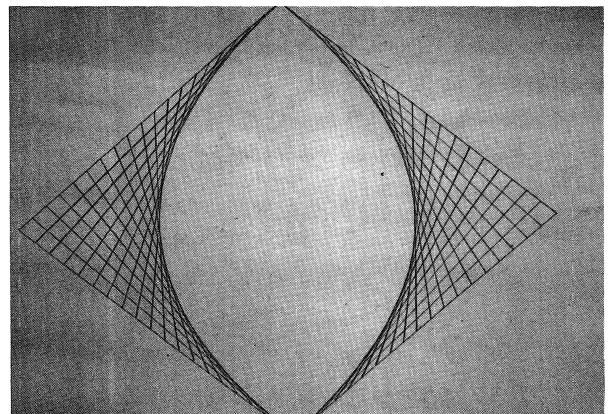


写真17

これらの作品は中心化の表現であるとともに、新しい世界の始まりや誕生を思わせるものがあった。

〈第6期〉「懐かしい」場所への回帰、そして「新たな旅立ち」へ(第49回～最終回まで)

一時、定時制高校に転校するかA高に留まるかで、両親と意見が食い違うが、結局T男自ら定時制に移ることを決意する。「大学検定」をも視野に入れての決定であった。「天才バカボンのパパ」が生き方の一つの理想像とされ、「これでいいのだ」「何が起ころうとも大丈夫」をモットーにしたいと言う。彼自身の希望で、面接が2週に1回となり、夢の報告も減る。

この頃の夢にはしばしば、中学や高校の級友が登場す



写真18

る。第49回報告の夢もその一つ。

夢47 《何かスタジオがあって、KやNら中学の時の友だちと音楽のテープを聴いている。そこに宮崎美子がいて「疲れたから、外へ行こうよ」と言う。そこでみんなで外に出ると、森の中の細い道があって、そこで松ぼっくりをたくさん拾う。「町の中にも、こんなきれいな所があったのか」と思う。》

連想は「とにかく外は森で、きれいだった。宮崎美子はやっぱりあの田舎っぽい感じがいい。ぼくはツッパリは好きじゃないから」。同年輩の友人関係とともに「外に出る」という点も、今後の良好な見通しを示すものとして注目された。

第51回面接では、夢47の発展形と思われる次のような重要な夢が報告される。

夢48 《夕方、薄暗い道を走っていると神社の近くまで来る。中に入って、手を洗うところまで来ると、知らないお婆さんがいる。死んだお祖母さんのようなやさしい感じの人で、「これは神社の神様か？」って思う。一緒にお堂に入っていくと、そこには大きな太鼓が置いてある。ところが表面が鏡のようにつるつるで、いつの間にか波みたいにならなくなってきて、今度はぼく一人でその太鼓の中に入って行ってみる。すると、夕焼けがものすごくきれいな場所に出る。野原や田んぼがずっと続いていて、空一面きれいな夕焼けだった。》

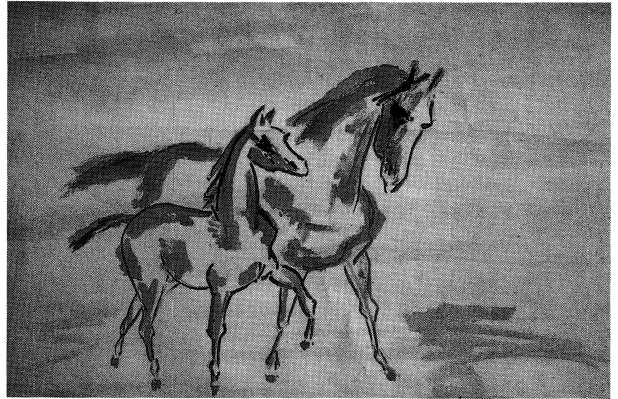


写真19

治療者は、この面接が「神社の池」に彼が飛び込んだことから始まったことを思い出して、感銘深く思う。「鬼婆」の登場する夢11からの、ひとつの治療的な到達点として見ることもできよう。連想を聞くと、「ものすごく不思議な夢だった。なんか懐かしい感じの所に出たみたい。『夕焼けこやけ』の歌のもとになったお寺があるらしいけど、そこに行ってみたいと思う」。これまでの治療過程のまとめとして、「お祖母さん」の力を借りて、母性的な「故郷」へと回帰していった夢であるようにも思える。

描画はこの時期、軽く表現されたものが多くなる。クリスマスを目前にした第52回面接では、「サンタクロース」の絵が持参される。

描画38 《メリークリスマス》(写真18)

クレパス画、中央に大きな袋を持って左手をあげているサンタクロース。

「素朴な気持ちで描いた。子どもが大喜びしそうな感じ」と説明する。

続く第53回の絵画には、「夕焼け」の中を歩いていく「親子の馬」が描かれてある。

描画39 《お馬の親子》(写真19)

唯一の水彩画。夕焼けを背景に、寄り添って右方向に進む親子の馬。もちろん描画28の「猿の親子」の発展形でもあろう。やわらかい筆のタッチが印象的。「夕焼け」は、夢48にもつながる。

連想は「『お馬の親子』という童謡を思い出して描いた。夕焼けの中ポックリ、ポックリ歩いていく足音が聞こえてくるみたい」。治療者は「お馬の母さん、優しい母さん」という歌詞を思い出して、「お母さん、やさしくなった？」と聞いてみる。彼は「そんなにすぐには変わら



写真20

ないけど、今はそれほど怖いとは思わなくなったから」と笑う。

第55回面接に持参の絵には、驚いたことに治療者の似顔絵が描かれてある。

描画41《O先生》(写真20)

サインペン、鉛筆画。「先生を描いてみた。もうこれで描きたいものがなくなってしまった」と言うので、絵画療法は終了とする。今までの感想を聞いてみると、「初めはすごく得意になって描いてたけど、今思うとそうどってことないような気もする。でも面白かった」と述べる。

登校を目前とした第57回面接では、以下の最終夢が報告される。

夢56 《家の廊下で、のんびり日なたぼっこをしている。それから少し外に散歩に出かける。お日さまが照りよい天気、周りに花も咲いていて、もうすっかり春になったことに気がつく。》

連想は、「のんびりした感じ。落ちこぼれでも、開き直れば怖いものなしだから、これでいいんじゃないかなあ。これからはマイペースでいくつもりだから」と言う。

登校が始まり、T男の希望で治療も終結となる。1ヶ月後、約束しておいた最終回は、結局すっぽかされてしまう。代わりに来た母親の口から、「今は学校でも気楽にやれているので、心配はいらないから」との言伝てをもらう。治療者は、彼の「新たな旅立ち」とこれからの行

路に、当然のことではあるが、幸多からんことを願う気持ちでいっぱいとなる。

IV. おわりに

その後、多少の紆余曲折はあったものの、T男は無事大学を卒業して、ある福祉関係の専門職についた。大学の入学や就職が決まった時点、結婚して父親となった時点などに数度、近況報告に来院する。ほぼ治療の効果が確認され、予後良好の症例と考えてよいと思う。私が臨床に従事するようになって6年目の臨床経験であり、今見直してみても幾分性急で、技術的に未熟な点が目につくことも多いが、若さゆえの取組みに対する熱意と真剣味とが、少しでも伝わるのができたならと思う。主として「鬼婆」の姿をとった迫害的な内的対象イメージの変容に主眼をおいて、心像過程を検討してみたが、もちろん他にもさまざまな観点からのストーリー化が可能であろう。ここでいう内的対象(Klein, M)とは、無意識的空想にもとづく心的機能が、具体的な内的心像を形成したものであり、夢や絵画表現はその様態の反映として考えられる。それは内界のみにとどまるものではなく、投影や投影同一化をとおして外在化し、その再演化や劇化によって「現実」が構成されていくことこそが、本症例を通して筆者が体験的に一番学んだ点でもあった。それこそ「われわれは夢と同じ織物で織られている」(シェイクスピア)ということでもある。

紙幅が限られていることもあって、心像の治療上のとり扱い方や留意点について、筆者の考えや技法を述べる余裕はなかった。末尾にあげておいた文献を参考にしていただけたらと思う。全体的に治療関係に身を置いて「読み」に徹し、理解を深めようと努めはするものの、解釈して言語化し、それを「伝えよう」という働きかけの少なさを感じられるかもしれない。できるだけ踏み込まないで、クライアントの内界を抱えながら、その変容を「見守る」という治療態度である。その詳しい検討は、また別の機会に譲りたいと思う。

謝 辞

本症例の主治医として、懇切にご指導いただきました共和病院名誉院長加藤邦之助先生に、こころよりお礼申し上げます。

参考文献

- 河合隼雄 (1991) イメージの心理学 青土社
- 河合隼雄 (1992) 心理療法序説 岩波書店
- Klein, M. (1985) 小此啓吾ら訳 妄想的・分裂の世界
メラニー・クライン著作集 4 誠信書房 (原著は
1975)
- 岡田敦 (1982) ある不安神経症者の面接過程—「死の恐
怖」から「吊いの夢」へ 上智大学臨床心理研究 6
- 岡田敦 (1983) 夢心像における「故郷」への回帰—ある
中年男性の面接過程 心理臨床ケース研究 1 誠信
書房
- 岡田敦 (1986) 自己臭を訴えたある女子高生の「夢」と
現実 上智大学臨床心理研究 10
- 岡田敦 (1989) 夢と精神療法 精神療法の実際 新興医
学出版社
- 岡田敦 (1995) 精神科臨床における〈壁〉 心理臨床 8
3
- 岡田敦 (1997) 「転移劇」としての治療 転移／逆転移—
臨床の現場から 人文書院
- 岡田敦 河野莊子 (1997) コラージュ表現とその治療的
意義について 名古屋造形芸術大学・名古屋造形芸
術短期大学紀要 3
- 岡田敦 (1998) 夢分析と治療関係—「気持ち悪い夢ばか
り見る」と訴える中年女性 心理臨床の実際 6 金
子書房
- Segal, H. (1988) 松木邦裕訳 クライン派の臨床 岩崎
学術出版 (原著は1981)
- Segal, H. (1994) 新宮一成訳 夢・幻想・芸術 金剛出
版 (原著は1991)
- Segal, H. (1997) On symbolism, Psychoanalysis,
Literature and War, Routledge.

* 名古屋造形芸術大学講師(芸術心理学) 共和病院精神科